

# 看護学生の遺伝病に対するイメージ

## Nursing Students' Perceptions of Hereditary Diaseses

水上 知香<sup>1)</sup>, 高田谷久美子<sup>2)</sup>  
MIZUKAMI Chika, TAKATAYA Kumiko

### 要 旨

山梨県の4年制看護系大学に在学中の看護学生130名を対象に、「遺伝病(親から子に伝わる)」と他の疾患とのイメージの相違について検討した。

その結果、「遺伝病」の方が「病気」よりも、「治らない」、「助からない」、「怖い」、「断ち切れない」、「果てしない」、「永続的」、「避けられない」、「重い」、「知りたくない」、「家族の」と捉えられていた。

またこれらの因子分析を行ったところ、「遺伝病」では「逃れられない」「つらさ」「逃避的な感情」「対処不能」「偏見」「不安感」に関する6因子が、また「病気」では「つらさ」「致命的」「自分の責任か迷う」「果てしなく続く」に関する4因子が得られた。

以上から、「遺伝病」も「病気」もつらいが、「遺伝病」は自分も「家族」を通して受け継いできているかもしれないが、自分一人で終わるものではなく再び受け継がれ、永遠に続いていってしまう、一方で社会の偏見があるというイメージがあり、それに対して「病気」では、自らの生活習慣が関与している可能性があるというイメージがもたれていることがわかった。

In this study we analyzed the perception of hereditary diseases and related factors as compared to other diseases. The subjects were 130 nursing students of a university in Yamanashi.

The subjects perceived the following about hereditary diseases more than other diseases: incurable, fatal, fearful, perpetuating, endless, permanent, severe, avoidance and familial.

Using the factor analysis, six factors were extracted from hereditary diseases: 1) imprisoned, 2) pain, 3) escape response, 4) uncontrollable, 5) prejudice, and 6) anxiety. Meanwhile, 4 factors were extracted from other diseases: 1) pain, 2) fatal, 3) ambivalence, and 4) endless.

Both hereditary diseases and other diseases were perceived as painful. However, the perception of hereditary diseases was not the individuals' problem or fault, "crossing from one generation to another", uncontrollable, and prejudice, but the perception of other diseases was that they are caused by lifestyle.

キーワード イメージ, 遺伝病, 看護学生, SD法

Key Words Perceptions, Hereditary Diseases, Nursing Students, Semantic Differential Method

### 1. はじめに

2003年にヒトゲノム計画が終了し、現在、ヒトの遺伝子数は約3万個と推定されている。こうした遺伝学の急速な進歩により、遺伝要因の関与する疾患の相対頻度が

上昇し、遺伝性疾患はありふれた疾患の一つになってきている。

わずか1個または1対の遺伝子の異常に起因する単一遺伝子病(メンデル遺伝病)の発症頻度は約2%とそれほど多くはないが、さらには多くの先天奇形や高血圧、動脈硬化といった遺伝要因と環境要因との相互作用である多因子遺伝病、染色体異常症などをいれると、その発症頻度はヒト集団の60%以上と推定される。つまり、6~7割の人は一生の間になんらかの遺伝性疾患に罹患するか、またはその可能性を持っていることになる。

このように考えてくると、メンデル遺伝病に罹患している人であっても、たまたま1個または数個の変異遺伝

受理日: 2007年6月5日

1) 山梨大学医学部附属病院看護部: University of Yamanashi Hospital

2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部: Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

子をもったからであり、人の多様性の一つともいえる。個々の遺伝病の発症頻度は稀なものが多いが、一見全く健康と思われる人でも、6~8個の重篤な劣性遺伝病の遺伝子をヘテロの状態を持っており、だれでも罹患する可能性のある疾患である。このようなことがあるにもかかわらず、これまでの研究や調査では「遺伝」=「親から子に伝わる」という言葉に引きずられるためか、「遺伝性疾患(遺伝病)」に対し否定的なイメージをもつという結果が報告されている<sup>1,3)</sup>。

こうした否定的なイメージは、遺伝性疾患をもつ人やその家族、また周囲の人々などに様々な問題を与えている。例えばインフォームドコンセントが十分でないにも関わらず遺伝的な検査、即ち遺伝子診断、あるいは発症前診断、出生前診断などの実施、遺伝情報の守秘と公開の問題、遺伝情報による差別(結婚、就職、保険など)などに関することがあげられる。遺伝医療の重要性が高まるなかで、遺伝や遺伝病の正しい理解と、誤解と偏見にとらわれない客観的な見方が必要である。

本研究では、看護学生を対象に「遺伝病」を親から子に伝わりと限定したものととしてどのようなイメージがあり、またそのイメージが他の疾患と比べてどのような違いがあるかを明らかにし、さらにその要因について検討し、今後、「遺伝病」の患者やその家族に対する看護のあり方を考えていくための基礎資料を得ることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 対象と方法

山梨県の4年制看護系大学に在学中の看護学生130名を対象とした。なお、本調査の前に同大学の2年生65名を対象に、「遺伝病・遺伝性疾患」に対するイメージを自由に記述してもらった質問調査を実施した(実施時期は2006年6月)。その結果、「避けられない(18名)」、「治らない(14名)」、「怖い(15名)」また疾患としては「ダウン症(36名)」、「血友病(16名)」などが多く、そのほかにも「結婚を迷う」「親のどちらかが持っていたかと思うとぞっとする」「子孫を残せない」といったようなことばが得られた。この中から、類似したことばをまとめ取捨選択し、SD(Semantic Differential)法を用いて「治る-治らない」「助かる-致命的」「怖くない-怖い」「わかる-わからない」など29対のことばを選び出し、本調査用のアンケート用紙を作成した。回答は、「治る-治らない」に対しては、「どちらでもない」を中心の4点とし、「まったくそう思う(治る)」1点から「まったくそう思う(治らない)」7点までといった7段階とし、対象者が考えるイメージにより近い数値を選ぶというものである。数値が高い方がよりマイナスイメージであるようにした。これらの言葉に対し、病気(いわゆる病気というものとした)

と遺伝病(親から子に伝わる病気とした)についてそれぞれ回答を求めた。

アンケート用紙は、研究の主旨は紙面にも記載し説明しておいたが、口頭で説明し、直接配布した。回収は学生が日常出入りする場所に回収箱を設置して行った。調査期間は2006年7月の末~8月であった。なお、研究への参加は本人の自由意志であり、無記名であること、参加しないことによる不利益は生じないことを伝え、アンケート用紙の返信をもって協力への同意とみなした。

### 2. 分析方法

分析にあたっては、SPSS 14.0J for Windowsを用い、単純集計及び29対の言葉それぞれに関する平均値を算出し、遺伝病と病気の平均値の比較には対応のあるt検定を行った。さらに、Halwin ver.6.24を用いて、29対の言葉に対する反応をバリマックス回転し、因子分析を行った。

## III. 結果

アンケートは130部配布し、回収は77部であった(回収率:59.2%)。

病気と遺伝病に対するイメージの違いを検討するために、各質問項目の平均値をそれぞれ算出し、t検定を行った(表1)。全体として5点以上とよりマイナスイメージであった項目数は、「遺伝病」が14項目、「病気」が8項目と「遺伝病」の方が多かった。

「遺伝病」と「病気」での回答に有意差がみられたもののうち、「遺伝病」の方が得点の高かったのは「治る-治らない」、「助かる-助からない」、「怖くない-怖い」、「断ち切れる-断ち切れない」、「限りのある-果てしない」、「断続的-永続的」、「避けられる-避けられない」、「軽い-重い」、「知りたい-知りたくない」、「個人的-家族の」の10項目であった。逆に「病気」の方が得点の高かった項目は、「必然の-偶然の」、「混乱しない-混乱した」、「孤立しない-孤立した」の3項目であった。

次にこれら「病気」及び「遺伝病」のイメージの要因を検討するために因子分析を行った。主因子法因子分析バリマックス回転後の結果を表2及び表3に示した。なお、因子数の決定にあたり、固有値寄与率が5%以上のものを選出し、「遺伝病」で6因子、「病気」で4因子が得られた。

因子負荷量が絶対値0.4以上のものをその因子と関係性があると判断したところ、各因子と関係のある質問項目は表4のようにまとめられた(複数の因子に0.4以上の負荷量を示す場合、最も負荷量の高い因子に含むものとする)。

「遺伝病」の因子をみていくと、因子1は「永続的」「避けられない」に負荷量が高く、また「家族の」が入るこ

とから、家族に限られたのものとして、それから逃れられず、永遠に続いていくといったことを示す因子、因子2は「[苦しい] [つらい]」のいずれも負荷量が高く、つらさに関する因子、因子3は「[致命的] [治らない]」で負荷量が高く、「[知りたくない]」が加わることで、治らないなら遠ざけていたいといったような逃避的な感情を示す因子、因子4は「[混乱した]」で負荷量が高く、「[未知の]」あるいは「[怖い]」などから、自分で捉えようもなく対処不能な気持ちを示す因子、因子5は「[理解されない]」で負荷量が高く、社会との関係を示すものと思われ、生活のしにくさや偏見に関する因子、因子6は「[暗い] [不安]」と先が見えず不安を示す因子とした。なお、これら6つの因子をあわせた寄与率は43.7%であった。

「病気」の因子をみていくと、因子1は「[苦しい] [つ

らい]」のいずれも負荷量が高く、「[遺伝病]」の因子2と同様、つらさに関する因子、因子2は「[治らない] [致命的]」のいずれも負荷量が高く、致命的な病気という意味の因子とした。因子3は「[混乱した]」の負荷量が高いが、「[責任のある]」も含むことから、病気の原因を自分でつくっているのではないかといった迷いを示す因子とした。因子4は「[果てしない]」の負荷量が高く、すぐに治るものではなく果てしなく続くことを示す因子とした。なおこれら4つの因子をあわせた寄与率は26.2%であった。

#### IV. 考察

これまでの「[遺伝]」や「[遺伝病]」に対するイメージの研究では否定的なイメージが多い結果が報告されている。

表1 「病気」と「遺伝病」に対するイメージの比較

	n	病気			遺伝病		p値
		平均	標準偏差		平均	標準偏差	
治る-治らない	75	3.6	1.23025	<	5.2533	1.23127	0.000
助かる-助からない	75	3.3733	0.96944	<	4.68	1.05472	0.000
怖くない-怖い	75	5.32	1.26448	<	5.6533	0.99313	0.037
わかる-わからない	75	4.5333	1.2118	<	4.7333	1.2229	0.24
必然の-偶然の	75	4.1467	1.41128	>	3.3467	1.62325	0.000
断ち切れる-断ち切れない	75	4.6933	1.31492	<	5.36	1.03506	0.000
限りのある-果てしない	74	4.6351	1.38063	<	5.1486	1.23513	0.004
断続的-永続的	75	4.24	1.31355	<	5.3867	1.11371	0.000
安心-不安	75	5.8933	1.02104	>	5.88	1.02614	0.912
寿命と関係のない-短命な	75	4.6933	1.15048	=	4.6933	1.24089	1
避けられる-避けられない	75	4.64	1.44858	<	5.88	1.06492	0.000
軽い-重い	74	4.7297	0.99722	<	5.3784	1.20163	0.000
不思議ではない-不思議な	75	4.0933	1.33734	>	3.9067	1.52611	0.401
既知の-未知の	75	4.68	1.22099	>	4.4	1.4426	0.196
混乱しない-混乱した	75	5.32	1.00216	>	4.9467	1.20689	0.016
隠さない-隠す	74	4.1757	1.4652	<	4.3514	1.54771	0.335
苦しくない-苦しい	75	5.68	0.96086	>	5.4667	1.1547	0.092
つらくない-つらい	75	5.8	1.10282	>	5.7067	1.04975	0.435
責任のない-責任のある	75	4.4667	1.45503	>	4.1867	1.69014	0.169
幸運な-不運な	71	5.2817	0.9439	>	5.2113	1.30838	0.655
明るい-暗い	71	5.4507	0.93791	>	5.2254	1.05826	0.062
理解される-理解されない	71	4	1.2189	<	4.1549	1.35907	0.415
受け入れられる-受け入れられない	71	4.3239	1.19253	<	4.5211	1.42287	0.268
知りたい-知りたくない	71	2.6338	1.43666	<	3.2394	1.52564	0.001
自立した生活ができる							
-何らかの支援が必要	70	4.1429	1.23107	<	4.3286	1.18837	0.236
結婚・妊娠に影響のない							
-結婚・妊娠に影響のある	71	4.6761	1.45184	=	4.6761	1.6281	1
個人的-家族の	71	4.5634	1.52814	<	5.0423	1.4778	0.012
費用のかからない-費用のかかる	71	5.493	1.32959	>	5.1408	1.40708	0.066
孤立しない-孤立した	71	4.507	1.16953	>	4.1268	1.30854	0.043

表2 「遺伝病」の因子分析一回転後の因子負荷量(直交回転)バリマックス法による一

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
必然の-偶然の	-0.2625	-0.0371	-0.2241	-0.0263	0.2618	-0.0446
断ち切れる-断ち切れない	0.5849	-0.0001	0.3946	0.2974	0.0729	0.2714
限りのある-果てしない	0.4287	0.0952	0.3935	0.1124	-0.1288	0.3196
断続的-永続的	0.8408	0.1271	0.0673	0.0400	-0.0649	-0.0170
避けられる-避けられない	0.8090	0.2071	0.1784	0.0315	0.1232	0.0949
個人-家族の	0.4019	0.1781	0.0776	-0.1304	-0.2395	0.2142
軽い-重い	0.2183	0.3175	0.0979	0.0746	0.1410	-0.1474
苦しくない-苦しい	0.0596	0.8828	0.0620	0.1072	0.0513	0.0923
つらくない-つらい	0.2789	0.8071	0.0350	0.1998	0.1276	0.1514
責任のない-責任のある	-0.1803	0.2059	-0.0056	0.0635	0.0275	-0.0096
不運な-幸運な	-0.2337	-0.2828	0.0179	0.0036	-0.1428	-0.1579
孤立した-孤立しない	0.0191	-0.2307	-0.0248	-0.0114	-0.0396	0.0201
知りたい-知りたくない	-0.1654	0.0016	0.4055	-0.0728	0.2936	0.1426
治る-治らない	0.3671	-0.0888	0.7519	0.0314	-0.0224	0.0802
助かる-致命的	0.0825	0.1677	0.8412	0.0413	0.1596	0.0551
怖くない-怖い	0.1666	0.1109	0.4209	0.5801	-0.0180	0.1781
既知の-未知の	0.0170	0.1035	-0.1963	0.6220	0.0551	0.1285
混乱しない-混乱した	0.0655	0.2035	0.0638	0.8430	0.2339	-0.0401
自立した生活ができる-何らかの支援が必要	-0.0693	-0.1042	0.0344	0.1638	-0.1116	0.1620
分かる-分からない	0.0830	0.0683	-0.0116	0.1211	0.1888	0.1652
不思議な-不思議ではない	-0.1015	-0.0210	0.1908	-0.0603	-0.2338	0.0103
隠さない-隠す	-0.0555	0.3113	0.1038	0.3327	0.3904	0.0512
理解される-理解されない	0.0200	0.1246	0.0886	0.1772	0.8439	-0.0002
受け入れられる-受け入れられない	0.0528	0.0861	0.1195	0.1374	0.6051	0.3562
結婚・妊娠に影響のある-ない	0.0950	0.0842	-0.0389	0.2562	0.1826	0.0375
費用のかかる-費用のかからない	-0.1886	-0.1678	-0.0065	-0.0707	0.1927	-0.1720
明るい-暗い	0.0926	0.2580	0.1476	-0.0339	0.2162	0.6922
安心-不安	0.3430	0.3044	0.1693	0.3598	-0.0597	0.5413
寿命と関係のない-短命な	0.2129	0.2019	0.2289	0.0505	-0.0471	0.3206
因子負荷量の2乗和	2.7799	2.2798	2.2509	2.0346	1.8556	1.4803
因子の寄与率(%)	9.5859	7.8614	7.7617	7.0158	6.3985	5.1044
累積寄与率(%)	9.5859	17.4472	25.2090	32.2248	38.6233	43.7277

長谷川ら<sup>2)</sup>の研究では、遺伝病に関係のある言葉から浮かんでくるイメージ語句を記載するイメージテストを行い、「遺伝病」と、遺伝的要素は強いが印象の違いのような「胆石症」のイメージの比較を述べている。「遺伝病」のイメージは、「嫌悪・逃避」「恐怖・ショック」「対処不能・困難」「異常」といったものが多かったのに対して、「胆石症」では、「疼痛感」「治療法」「病態」「環境要因」などが挙げられている。このことから、「遺伝病」のイメージは悲痛な疾患であり、さらには治療や予防も不可能で、手のほどこしようがないという諦めの暗い印象があり、「胆石症」では、これが広義の遺伝病であるにも関わらず、症状は辛そうだが治療は簡単という全く異なった結果となったとしている。本研究の結果でも、「遺伝病」と「病気」の得点差から、「遺伝病」の方がより「怖い」病気であること、また、自分一人で終わらず、[家族の]問題として受け継がれ、断ち切れるものではないこと([断ち切れない][果てしない])、家族で受け継がれているも

のを避けようがない[避けられない]病気であること、さらに「治らない」「助からない」「対処不能」な病気であると捉えていると考えられた。

また、因子分析の結果をみると「遺伝病」のイメージとして6つ、「病気」のイメージとして4つの因子があげられ、つらさに関する因子は共通であったが、その他は共通する部分はあっても異なっていた。「遺伝病」の因子3と「病気」の因子2では、いずれも致命的な意味合いを含むが、「遺伝病」の因子の方はさらに「知りたくない」が加わることで受け入れたくない・遠ざけたいといった感情を含めたものになっている。自分とは関係のない病気と思いたい気持ちの表れともいえるのではないだろうか。「遺伝病」の因子1と「病気」の因子4は果てしなく続くという意味はどちらも含んでいるが、「遺伝病」では、[家族の]や「永続的」「避けられない」を含むことから家族の問題として世代から世代へ受け継がれていき避けられない病気と捉えられていた。「病気」でも果てし

表3 「病気」の因子分析一回転後の因子負荷量(直交回転)バリマックス法による一

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
怖くない-怖い	0.1744	0.0184	0.1030	0.0707
安心-不安	0.3046	0.2603	0.0970	0.2355
苦しくない-苦しい	0.8764	0.0161	0.1457	0.0156
つらくない-つらい	0.8665	-0.0171	0.0920	0.1195
明るい-暗い	0.2022	-0.0908	0.0120	0.0635
知りたい-知りたくない	-0.2737	0.1779	0.0787	0.0767
個人-家族の	0.1684	0.0381	0.0794	0.0733
費用のかかる-費用のかからない	-0.3640	-0.0329	-0.0289	-0.0237
孤立した-孤立しない	-0.3097	-0.0621	0.0754	0.1190
治る-治らない	-0.0479	0.7926	-0.0322	0.1842
助かる-致命的	-0.0089	0.7394	-0.0176	0.1069
断続的-永続的	0.1117	0.3983	0.0513	0.2283
寿命と関係のない-短命な	0.1991	0.2125	0.1250	-0.0714
軽い-重い	0.2251	0.2647	0.0736	-0.0551
不思議な-不思議ではない	-0.1133	0.1556	-0.0132	0.0109
隠さない-隠す	0.0803	0.3559	0.2055	0.1389
自立した生活ができる-何らかの支援が必要	0.1064	-0.1204	0.1005	-0.0842
必然の-偶然の	0.0835	-0.0056	0.1013	-0.0546
既知の-未知の	-0.0184	-0.0180	0.5888	0.2107
混乱しない-混乱した	0.3323	-0.0159	0.7703	0.0274
責任のない-責任のある	0.3941	-0.1108	0.4246	0.0477
不運な-幸運な	-0.1077	-0.0610	-0.1432	0.0073
結婚・妊娠に影響のある-ない	-0.1395	-0.2216	-0.3269	-0.0190
分かる-分からない	0.1365	0.1114	0.0440	0.4025
断ち切れる-断ち切れない	0.0570	0.2847	0.2011	0.4832
限りのある-果てしない	0.1271	0.2394	0.0799	0.7638
避けられる-避けられない	0.2399	0.3277	-0.1876	0.3396
理解される-理解されない	-0.0439	0.0276	0.0448	0.1728
受け入れられる-受け入れられない	-0.0986	0.0573	0.1735	0.2065
因子負荷量の2乗和	2.5617	2.0569	1.5205	1.4547
因子の寄与率(%)	8.8333	7.0927	5.2431	5.0161
累積寄与率(%)	8.8333	15.9261	21.1692	26.1852

なく続くという因子があげられたことでは、長谷川らの「胆石症」とは異なり治療は簡単ではなく時間はかかるかもしれないと捉えているが、[分からない]を含んでいることから、どうして病気になるのかは疑問であることを示しているであろう。「遺伝病」の因子4と「病気」の因子3は未知のものであり混乱するという意味はどちらも含んでいるが、「遺伝病」では「怖い」という恐怖感が、「病気」ではそれは自分の責任でもあるのかという迷いの感情がでてきているといった違いが見られた。

前述の長谷川らの研究で「遺伝病」のイメージに「嫌悪・逃避」「恐怖・ショック」「対処不能・困難」「不安・痛惜」という言葉が得られているが、これは今回得られた「遺伝病」の因子3(治らないなら遠ざけていたいといったような逃避的な感情を示す因子)、因子4(自分で捉えようのない恐怖感、対処不能な気持ちを示す因子)、因子6(不安感に関する因子)と同様の意味を含んでいると考えることができる。一方、「病気」のイメージでは「疼

痛感」「環境要因」という言葉が得られており、「疼痛感」は今回得られた「病気」の因子1(つらさに関する因子)と同様の意味を含んでいると考えられる。しかし、今回の結果では「病気」も因子4にみられるように果てしなく続くことと捉えられていた。因子3(自分の生活習慣・生活行動にも責任があるのかという迷いに関する因子)があげられたことから考えると、死因の60%以上を生活習慣病が占めている今日では、「病気」として生活習慣病をイメージしたと思われる。本研究とこれまでの研究の結果をあわせて考えていくと、「遺伝病」も「病気」もつらいが、「遺伝病」は自分の責任でもなく、自分一人で終結するものではなく、自分の子へと「家族」を通して伝わってしまうこと、あるいは自分もその「家族」の一員であることにより伝わってきたものであり、避けることはできず永遠に続いていく、また不治の病であり対処不能である、一方で社会や周囲から理解されずに生活がしにくい、というイメージがある。それに対して「病気」では、自ら

表4 「遺伝病」および「病気」の因子

遺伝病	病気
因子1 断ち切れない 果てしない 永続的 避けられない 家族の	因子4 断ち切れない 果てしない 分からない
因子2 苦しい つらい	因子1 苦しい つらい
因子3 治らない 致命的 知りたくない	因子2 治らない 致命的
因子4 未知の 混乱した 怖い	因子3 未知の 混乱した 責任のある
因子5 理解されない 受け入れられない	
因子6 不安 暗い	

の生活習慣(環境要因)が関与している可能性があり、自分の責任かもしれないというイメージがもたれていることがわかる。しかし、「病気」の因子寄与率は26.2%と低く、選択した言葉自体を「遺伝病」から想起した言葉の中から選んだためと思われること、また「遺伝病」でも寄与率が43.7%と半分であったことから十分とはいえない。

松本ら<sup>3)</sup>は「否定的」イメージ(‘暗い’‘特殊’‘宿命的’‘秘密’‘運’‘神の定め’‘罪・罰’‘恥’)以外にも、「肯定的」イメージ(‘変化しうる’‘乗り越えられる’‘幸福に役立つ’‘その人らしさ’)、さらに‘個人の問題’‘家族の問題’を加えた項目を用いて医学関係の学生を対象に調査を行っているが、否定的イメージは43%、肯定的イメージは35%であったという。また、同様の調査を一般市民を対象に行った結果<sup>4)</sup>では、否定的イメージ54%、肯定的イメージ20%となったとしている。このことから、さらに肯定的な意味合いの言葉を工夫して調査する必要があると思われる。

ところで、前述の松本らの調査<sup>3)</sup>で、周囲に遺伝性疾患があるという群での結果では、遺伝性疾患は自分とは無関係ではないと考え、「遺伝」イメージは‘宿命的’であり‘変化しうる’ことはあまりなくても、それは‘秘密’ではなく‘その人らしさ’という個性として受容し‘乗り越えられる’と希望を持つようとしており、肯定的なイ

メージが強くなったとしている。これは遺伝に対する意識や理解の相違が、回答に影響を与えていることが考えられる。今回「遺伝病」イメージの潜在因子として、因子5(生活のしにくさや偏見に関する因子)がでてきたが、これは一般に対する正しい知識の提供をすることにより理解を深め、変化させることができるものとして考えられる。

有森ら<sup>5)</sup>は、医療従事者を対象に看護職者に求められる遺伝看護実践能力を調査したところ、『生活支援』『精神的支援』『正しい遺伝情報の提供と交換』『クライアントの理解の支援』などが選ばれたとしている。また中込ら<sup>6)</sup>によると、遺伝病患者や家族が何を知りたいかを明確にし、それに対応していく事で、患者が心を開く場となり、資源を有効に使う事ができるとしている。遺伝病患者や家族は、診断や治療の経過において大きな精神的打撃を受け、将来への恐れと不安、深い悲しみや絶望を体験し、徐々に新しい生活や価値観を作り上げる途上にある。自分自身の病気を正しく理解し、療養行動の自己決定、家族内で真実を共有していくことで、憂鬱な気持ちが減少し、ライフスタイルを積極的に変容させる事ができると述べている。

「遺伝病」を身近なものとして捉え、遺伝医療に携わる様々な職種の人々、また遺伝病患者やその家族、地域の人々とが相互に情報や正しい知識を交換し、遺伝病に対する理解を深め、遺伝病患者やその家族が生活しやすい環境をつくり、支援していくことが大切である。このためには看護職者をはじめ、医療に携わる多くの人々は、常に新たな知識や情報を獲得していく必要がある。遺伝学の進歩に伴い、遺伝医療の重要性が高まる中で、遺伝看護の土台作りは必須条件であるといえる。

今回の研究では、看護系大学の学生を対象に行ったということで、「遺伝病」に関してなんらかの形で知識を得ていたり、興味を持っていたりということが考えられ、そのことが結果に影響を及ぼしている可能性もある。また、アンケートでは決められた言葉のなかでの選択、評価であったために自由な発想、感情を正確に求めることができなかった。今後、さらに地域における「遺伝病」の捉え方、遺伝病患者・家族のニーズなども検討し遺伝看護の土台をしっかりと築きあげていくことが必要である。

### 謝辞

本研究にあたり、快くご協力くださいました学生の皆様に心より感謝いたします。また、因子分析をご指導下さいました山梨大学大学院医学工学総合研究部の飯島純夫教授に深謝いたします。

引用文献

- 1) 藤木典生, 郡大裕, 森田益次, 他(1985) 遺伝相談－人類遺伝学の知識の臨床的応用－. 体質学誌, 49(1・2) : 121-138.
- 2) 長谷川知子, 五十嵐健康(1992) 遺伝相談を行う意義について－「遺伝病」に対する一般的イメージの基礎調査－. 平成4年度厚生省心身障害研究「発達障害児の早期ケアシステムに関する研究」 : 216-220.
- 3) 松本正, 森藤香奈子, 佐々木規子, 他(2004) 「遺伝」のイメージ－アンケート調査から－. 長崎大学医学部保健学科紀要, 17(2) : 17-20.
- 4) 松本正, 堀井健一, 近藤達郎(2003) 「遺伝相談(カウンセリング)」公開講座を実施して. 長崎大学医学部保健学科紀要, 16(2) : 87-89.
- 5) 有森直子, 中込さと子, 溝口満子, 他(2004) 看護職者に求められる遺伝看護実践能力 一般看護職者と遺伝専門看護職者の比較. 日本看護科学会誌, 24(2) : 13-23.
- 6) 中込さと子, 有森直子, 溝口満子, 他(2002) 看護職に必要な遺伝看護実践能力 遺伝医療にかかわる看護職の聞き取り調査から. Quality Nursing, 8(3) : 237-245.